通算 307 回 茅ヶ崎郷土会 史跡文化財めぐり

大和市に諏訪神社・深見城址などを訪ねる

令和 5 年度の史跡巡り、市外編第 2 回は大和市の史跡など訪ねます。見学地は大和市役所 2014 年発行の『やまと歴史マップ』から深見城址周辺の神社・寺院を巡るコースを選びました。また、この案内の解説も多く同書から引用しました。

日時 **令和 5 年(2023)12 月 9 日(土)**

（事前の勉強会は同年 11 月 21 日(火)13:30 市立図書館第 1 会議室）

集合 **茅ヶ崎駅改札前 8 時 50 分まで**

行程 茅ヶ崎駅発 9:03―(東海道線)―JR 藤沢駅着 9:09 小田急藤沢駅発 9:19(小田急線)―鶴間駅着 9:43 ―(これから徒歩)―①矢倉沢往還―②日枝神社―③伊勢社―④諏訪神社―⑤鶴林寺―⑥下鶴間ふるさと館―⑦大黒天・開運神社―⑧観音寺―⑨深見城址―⑩下鶴間長堀の遺跡―(バス停「鶴間車庫」から鶴間駅)―藤沢駅―茅ヶ崎駅(解散)

連絡先 山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

次回の史跡文化財めぐり 第 308 回市内の東海道探訪①小和田・菱沼などを訪ねる

令和 6 年 3 月 9 日（土）集合時間、場所は検討中

（事前勉強会 同年 2 月 20 日（火）午後図書館の予定）

はじめに

令和5年の史跡巡り一回目の早川城址（綾瀬市）は下見の時に暑く、10月に行った本番当日も暑さの心配をしていたのですが、暑さもおさまり快適に歩くことができました。今回の大和市深見城址は 12 月が本番となります。さらに涼しく歩けるコースとなっています。茅ヶ崎駅から藤沢駅経由、小田急線で鶴間駅まで行き、目的地周辺を巡ります。目的地は江戸時代は下鶴間村で、その隣の深見村の一部も含みます。本番では、初冬の涼やかな風の中の歩きを期待しています。

『新編相模国風土記稿』の下鶴間村（一部を抜粋）

江戸より行程 11 里余り、戸数 122、東西 33 町南北 34 町余り。今、江原孫三郎、松平金治郎、都築又兵衛が知行なり。当村矢倉沢道、八王子道の駅郵にて、人馬の継ぎ立てをなせり〈**矢倉沢道**は幅 4 間、東の方、人夫は武州多摩郡鶴間村、道程 5 町、伝馬は同国長津田村、道程 1 里余り、2 所継ぎ立てのことを司れり。西の方は人馬共に郡中国分村、道程 2 里に達す。**八王子道**は幅 2 間、南方は長後村、道程 2 里 1 町 48 間、北方は武州多摩郡原町田村に継ぎ送れり。道程 1 里 48 間。〉また八王子道、村内にて 2 條となり、隴間（注　ろうかん＝畑の中の意）1 條を古道と唱え土人、横山道とも唱なう。

〇**境川**　東方武州界を通ず〈幅 5 間余り、土橋 2 を架す。〉

〇**浅間社**　村の鎮守とす。例祭 6 月朔日。貞享元年(1684)再建の棟札あり。観音寺持ち。

〇**諏訪社**　村の鎮守なり。例祭 7 月廿日、延宝 8 年(1680)の再建の棟札あり。式内、岩楯尾神社（いわだておじんじゃ）なりと伝う。〈ことは座間入谷村に弁ぜり〉△松樹神木なり。

〇**観音寺**　鶴間山東照院を号す。〈古は金亀坊の号あり〉古義真言宗〈武州都筑郡恩田村徳恩寺末。中興開山を頼満という〈慶長 13 年(1608)11 月 20 日寂す〉。本尊十一面観音〈慈覚作〉。また薬師を置く〈立像、長 8 寸、恵心作〉。境内に建武 5 年(1338)、延文 2 年(1357)の板碑 2 基あり〈履歴を伝えず〉。

〇**鶴林寺**　宝亀山寿翁院と号す。浄土宗〈鎌倉光明寺末〉。開山貞山覚智という。本尊弥陀を安んず。鐘楼　享保 2 年(1717)鋳造の鐘を掛く。不動堂。

〇**山中修理助貞信壘跡**（るいせき）　貞信あるいは貞住と伝う。北条氏の家臣にて天正年間(1573～1592)此の地に住すという。村の東により土地小しく高く、上は平地なり。今は山林および陸田となれり。　（『風土記稿』3 巻 349～350 頁）

『新編相模国風土記稿』座間入谷村（諏訪神社の項のみ）

〇**諏訪社**　神体は幣束。式内 石楯尾神社なりと云う〈神名帳に高座郡小五座の内、岩楯神社あり〉。天安元年(857)5 月、石楯尾神（ママ）、官社に列せし事、国史に所見あり〈文徳実録曰く「天安元年五月丙辰、近来霖雨（＝ながあめ）不霽（止まずヵ）、今日、京中水溢、是日、在相模国 従五位下 石楯尾神預官社」按ずるに、郡中下鶴間村、大島村諏訪社（注　相模原市緑区大島）をも式内石楯尾神社と伝う。津久井縣佐野川村（相模原

市緑区佐野川)、名倉村にも石楯尾神社あり、皆当国郡中小五社の一なりと称す。津久井縣は古当郡に孕りし地なれば、今、何れか旧社なるや考証を得ず。佐野川村神社に神体石楯と云う者（注　正しくは「物」ヵ）存し、縁起有り、併せ見るべし〉。村持。(『風土記稿』3 巻 340 頁)

相模国　神名帳に記載の郡別13社（Wikipediaから）

神名帳記載			比定社		
社名	読み	格	社名	所在地	備考
足上郡 1座（小）					
寒田神社	サムタノ	小	寒田神社	神奈川県足柄上郡松田町	
余綾郡 1座（小）					
川勾神社	カハワノ	小	川勾神社	神奈川県中郡二宮町	相模国二宮
大住郡 4座（並小）					
前鳥神社	サキトリノ	小	前鳥神社	神奈川県平塚市四之宮	相模国四宮
高部屋神社	タカヘヤノ	小	高部屋神社	神奈川県伊勢原市下糟屋	
			(論)高森神社	神奈川県伊勢原市高森	
比比多神社	ヒヒタノ	小	比々多神社	神奈川県伊勢原市三ノ宮	相模国三宮
			(論)比比多神社	神奈川県伊勢原市上粕屋	
阿夫利神社	アフリノ	小	大山阿夫利神社	神奈川県伊勢原市大山	
愛甲郡 1座（小）					
小野神社	ヲノノ	小	小野神社	神奈川県厚木市小野	
高座郡 6座（大1座・小5座）					
大庭神社	オホハノ	小	大庭神社	神奈川県藤沢市稲荷	
			大庭神社舊蹟/熊野社	神奈川県藤沢市大庭	元宮(舊蹟)
深見神社	フカミノ	小	深見神社	神奈川県大和市深見	
宇都母知神社	ウツモチノ	小	宇都母知神社	神奈川県藤沢市打戻	
寒川神社	サムカハノ	名神大	寒川神社	神奈川県高座郡寒川町	相模国一宮
有鹿神社	アリカノ	小	有鹿神社	神奈川県海老名市上郷	
石楯尾神社	イハタテヲノ	小	石楯尾神社	神奈川県相模原市緑区名倉	
			(論)石楯尾神社	神奈川県相模原市緑区佐野川	
			(論)石楯尾神社	神奈川県相模原市南区磯部	
			(論)諏訪明神	神奈川県相模原市緑区大島	
			(論)諏訪神社	神奈川県大和市下鶴間	
			(論)諏訪明神	神奈川県座間市入谷	
			(論)石楯尾神社	神奈川県藤沢市鵠沼	皇大神宮境内末社

『新編相模国風土記稿』の深見村（一部を抜粋）

江戸より 11 里。『和名抄』当郡の郷名に深見あり。宝徳(1449～1452)の頃は山田伊賀入道経光領して此の地に住す。永禄年間(1558～1579)は西原小三郎采地たり〈『役帳』に西原小三郎十貫文、東郡深見とみゆ〉。戸数 120、廣 15 町、袤 30 町余り。北下鶴間村。今、地頭二人、坂本小左衛門、坂本鏈吉貞明。往還 1、藤沢宿より武州滝山に達す。

幅 3 間ほど。
〇鹿島社　村の鎮守なり。鳥居の傍らに石標あり、「相模国十三座之内深見神社」と彫る。式内、郡中、小社五座の一なり〈「神名帳」曰く、高座郡小五座、深見神社云々〉。祭神は武甕槌尊（たけみかづちのみこと）なり。祭礼、村内、諏訪社と隔年 11 月、日を卜して執行す。
〇山田伊賀守経光城址　東北の隅にて境川に臨む。今、陸田及び林となる。土居の跡少しく残る。伊賀入道経光は藤原の枝流にて宝徳の頃(1449～1452)の人なり〈案ずるに、隣村鎌倉郡瀬谷村妙光寺の鐘は、元、武州都筑郡恩田村万年寺の鐘なりしを、伊賀入道経光、彼の寺より故あって預かり、後、妙光寺に寄進す。今、其の事、銘文に存す。文中に経光相州瀬谷郷に住せし事見ゆ。則ち当所を指して云うに似たり〉。(『風土記稿』3 巻 315～316 頁)

① 矢倉沢往還
江戸の赤坂五問から南足柄の矢倉沢に至り、足柄峠を経て駿河国の沼津は三島に通じる古道で、東海道の脇往還として東西を結ぶ政治・経済上重要な街道だった。特に箱根が開通する元和 4 年(1618) までは官道として利用されたため、矢倉沢には近世を通じて関所が設置されていた。
往還沿いの厚木や伊勢原には六斎市（ろくさいいち）が立ち、また江戸時代中期以降には伊勢原の大山に詣でる人々の往来が増加するなど経済的にも信仰的にも栄え、「大山道」「青山街道」とも呼ばれた。(『歴史マップ』p11)
☆滝山街道　八王子の滝山城（たきやまじょう）と鎌倉の玉縄城を最短距離で結ぶ戦国時代以降の古道で八王子道とも呼ばれる。南北に長く市域を横断しており、小田原北条氏が関東一円を支配する上で、政治・経済・軍事的に重要視した。(『歴史マップ』P11)

② 日枝神社
『風土記稿』下鶴間村の項 350 頁に「〇山王社」とあるものがこれと思われる。

③ 伊勢社
『風土記稿』下鶴間村の項 350 頁に「〇神明宮」とあるものがこれと思われる。

④　諏訪神社　（下鶴間 2540）
公所（ぐぞ）地区を除いた下鶴間の鎮守です。元は目黒川と境川が合流するあたりにありましたが、度重なる洪水のため現在地に移転したとされます。祭神は建御名方神（たけみなかたのかみ）で例大祭は 9 月 6 日です。諏訪神社の境内にある神楽殿は例大祭の余興などに使用されていますが、元々は鶴林寺境内から移設したものであり、明治時代に下鶴間村に設立された下鶴間学校の校舎として使用されていました。
〈諏訪神社の文化財〉
★諏訪神社北辰一刀流奉納額［市指定重要有形文化財（非公開）］

明治 19 年（1886）に北辰一刀流豊田平之らによって奉納された武道額で、縦 182 ㌢×横 273.5 ㌢の大きなものです。北辰一刀流は千葉周作を流祖とし、幕末に最もはやった流派です。この奉納額から江戸時代後期に成立した 4 つの流派、北辰一刀流・鏡心明智流・無刀流・天然理心流の分布圏を見ることができます。特に北辰一刀流・鏡心明智流・無刀流の分布が判明したことは貴重です。

★諏訪神社御神像［市指定重要有形文化財（非公開）

左腰に太刀を差し、右手は矢を執り、左手は扇状の持物を握る姿をした木造の男神立像です。寄木作りで玉眼嵌入、頭部と両手首先は差込みで全体に彩色が施されています。面部の作風から 17 世紀頃の作と考えられます。(『歴史マップ』p4)

⑤ **鶴林寺**　（下鶴間 1938）

宝亀山寿翁院と号し、鎌倉の光明寺を本山とする浄土宗のお寺です。永禄 12 年(1569)に貞山覚智和尚が開いたと伝わっています。明治期までの間に何度か火災に見舞われたため再建が繰り返されており、現在の本堂は昭和４９年（1974）に建てられたものです。本尊は阿弥陀如来です。また、境内にまつられている地蔵菩薩像は、地下に入って断食し、即身仏となった俗名崇信という人物の菩提を弔うため、享和３年(1803)に建立されたと伝えられています。

★鶴鳴学舎（下鶴間学校）

明治６年（1873）に下鶴間の井沢藤八の貸家を借りて設立された公立小学校です。明治８年（1875）に下鶴間学校と改名されました。その後、明治１５年(1882)観音寺本堂の仮教場に移り、さらに鶴林寺境内に校舎を建築しました。(『歴史マップ』p7)

⑥ **下鶴間ふるさと館**　（下鶴間 2359－5）

矢倉沢往還沿いの旧下鶴間宿に位置し、この場所にあった商家・旧小倉家住宅の母屋と土蔵を復元した施設です。母屋は安政３年(1856)の建築で、宿場の商家建築として県内でも数少ない建物です。土蔵は前身建物の古材を用いて大正７年（1918）に再建された商家の付属建築で、一般に袖蔵（そでくら）と言われています。(『歴史マップ』p10)

★矢倉沢往還の宿場　下鶴間宿（しもつるましゅく）

矢倉沢往還は大山道とも呼ばれ、東海道の脇往還として重要な交通路だった。その宿場である下鶴間宿には染め物屋・居酒屋・餅屋・質屋などの商家や、松屋・三津屋（みつや）・角屋（かどや）といった旅籠（はたご）があった。洋学者で画家の渡辺崋山は天保２年(1831)に「まんじゅうや」といわれる旅籠に一泊し、「酒を命し（ママ）、よし。飯うまし。」と記している。また商家の旧小倉家住宅のザシキの床板から墨書きの落書が見つかった。幕末の「安政三」（１８５６）の年紀のほか、大工と思われる「石田利三良（ママ）」という名前と黒船の絵などが描かれており、黒船を見た庶民の驚きのさまを表している。(『歴史マップ』p7)

⑦ **大黒天・開運神社**　高下家

⑧ 観音寺　（下鶴間 2240）

⑨ 鶴間山東照院と号す真言宗のお寺で、寺伝には宝暦年間（1751～64）に現在の寺号になったとあり、また、『新編相模国風土記稿』にも「観音寺鶴間山東照院ト号ス。古は金亀坊ノ号アリ。」とあることから、以前は金亀坊と号していたようです。本尊の十一面観音は秘仏で、12 年に一度卯年の 4 月に開帳されます（武相卯年観音札所第一番）。境内には本堂のほか弁天堂、金亀坊稲荷、太子堂があります。

〈観音寺の文化財〉

★観音寺厨子　〔市指定重要有形文化財〕

背面板壁の内部に「天文 13 年」（1544）の墨書があり、製作年代の分かる厨子として貴重です。正面扉は観音開きの桟唐戸で、上部には輪違い菱格子の格子窓がつけられています。頭貫・木鼻は比較的古い様式を留め、柱は上・下端をわずかに細めて丸くした粽柱です。柱と側板内面は黒塗り、扉と側面外面には朱塗りの跡が一部残っています。

★観音寺木造地蔵菩薩半跏像　〔市指定重要有形文化財〕

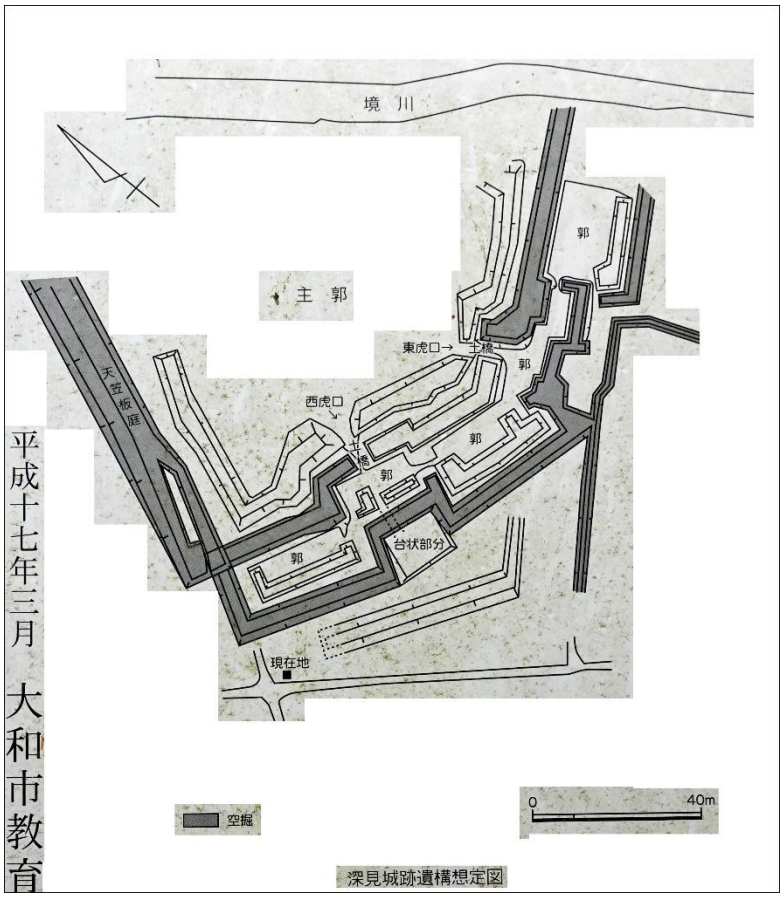
右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、蓮台の上に座して左足を垂下した地蔵菩薩で、光背は 3 個の宝珠を配した輪光です。寄木造りで玉眼嵌入、肉身部は漆箔です。耳孔や鼻孔は深く造られ、たいへん量感ゆたかです。江戸時代初期の作と考えられ、市内の仏教彫刻の中でも佳作といわれます。（『歴史マップ』p5）（画像は現地に立つ説明板を複写した）

⑩ **深見城址**　（深見字城ヶ岡）

境川に面した市内で最も保存状態の良い城址です。現在でも空堀や土塁、それらに区画された郭（くるわ）の様子がよくわかります。南北約 100 ㍍×東西約 150 ㍍程の城の範囲内には、屈曲に富んだ二重の空堀が巡り、敵が一気に主郭内になだれ込めないような造りになっています。発掘調査から城地の利用時期は、14 世紀末から 15 世紀中頃、そして 16 世紀代の 2 期に分けられると考えられています。また、『新編相模国風土記稿』深見村の項は城主を山田伊賀守経光としていますが、詳細はわかっていません。（『歴史マップ』P15）

★深見城跡

深見城は、境川に面した大地上に築かれています。北側から東側は切り立った急崖と



なっており、境川との比高差は15㍍あり、天然の要害となっています。西側は天竺坂の大規模な堀割り、そして南側は平坦地形を加工して曲折を多用した二重の堀と、土塁構造が密接に連携した東西二つの虎口（こぐち　門・出入り口）などを構築し、要害地形を形成しています。この縄張り構造は歴史遺構上、高い価値をもつものです。

発掘調査の成果から、この城の利用は 14 世紀末ころより 16 世紀末頃までの年代幅の中にあることがわかりました。一方、現存の城址の構造をみると、軍学による城制に整合することから16世紀戦国時代と思われます。（大和市教育委員会）（現地の説明板から）

大和市北部浄化センター（下鶴間 2698）**近くの遺跡**

★下鶴間長堀南遺跡　（下鶴間 2567）

北部処理場建設（北部浄化センター）に伴う事前発掘調査として昭和 58 年 4 月から翌年の 7 月まで発掘調査された。旧石器時代から中世にいたる重複遺跡。

旧石器時代では八つの文化層が確認されているが、第Ⅳ文化層の資料が特に充実している。当時は氷河時代で、その資料を残した狩人たちが生活していたのは現地表下約 2.5㍍の関東ローム層中の B.B1 層下面と推定されている。今から約 19,700 年前ころの狩人たちのキャンプ生活の跡が古富士火山起源の降下火山灰により封じ込められたものといえる。

狩猟具にはナイフ形石器が使用され、加工具にはスクレイパー・彫器（ちょうき）・

敲石（たたきいし）が、伐採具（ばっさいぐ）には礫器（れっき）が用いられ、暖房・調理の跡としての礫群（れきぐん）も発見されている。この時期の資料はナイフ形石器を量産するための石刃（せきじん）を作る石割り技術に特徴があり、その技術は「砂川型刃器技法（すながわがたじんきぎほう）と呼ばれている。この時期の同じような遺跡は全国的な広がりをもち、それには、地域色があることも認められている。（大和市教育委員会）（現地の説明板）

★下鶴間長堀遺跡

国道 246 号線建設に際して昭和 54 年(1979)に発掘調査が行われ、旧石器時代の遺物・遺構が出土しました。出土した細石刃石核（さいせきじんせっかく　細石刃を量産するために作られた中間製品）は、西南日本に多く分布する形態と技法が似ています。また、縄文時代の住居址　1 軒と土器のほか、奈良・平安時代（8～12 世紀）の土師器等が出土しています。(『歴史マップ』P10)

★長堀北遺跡　（下鶴間 2831）

西松株式会社技術研究所建築工事に際して昭和 62 年(1987)に発掘調査が行われ、旧石器・縄文時代草創期の遺跡が発見されました。なかでも縄文時代草創期の石器群は貴重なもので、細石刃石核は北海道・東北地方に特徴的な「湧別技法」が用いられています。(『歴史マップ』p10)

〈参考資料〉

・『やまと歴史マップ』2014 年 3 月 31 日発行　大和市教育委員会
・『新編相模国風土記稿』雄山閣版 3 巻
・現地の説明板
・　相模国式内社 13 座一覧表　Wikipedia

（令和 5 年 11 月 3 日記　山本俊雄・平野文明）

茅ヶ崎郷土会に入りませんか

・市内、近隣の歴史･史跡･文化財などを愛好する集まりです。年会費 1,500 円。

入会申し込み書

(ふりがな) 氏　名	
住　所	〒
電話番号	(固定) (携帯)
メールアドレス	
申　込　日	年　　月　　日　　年度会費を添えて申し込みます。